

滑稽と写生(発見)

前川敏夫

写生というものをいち早く俳句に取り入れたのは正岡子規だが、子規は俳句（当時は俳諧）界に殴り込みをかけて、当時の月並み俳句の宗匠達を撫で斬りにした。

江戸時代から続いた多くの伝統ある結社と宗匠は、膨大な博学に裏付けされた子規の鋭い攻撃に鳴りを潜めてしまったのである。

従来 of 俳句を味憎も糞も一緒くたに切り捨てて見たものの、子規自身新しい俳句の創造には苦勞したようだ。子規の日常は俳句の量産とその切り捨てに明け暮れている。執拗な攻撃で宗匠達を失業させたのだから、それに代わるものを提示しなければならない。

そんな折に子規は洋画家、中村不折と出会い、彼が唱道する「写生」という技術に注目する。自然を忠実に模写すればおのずと美が生まれるというものである。子規は何事も周到に徹底してやらねば気の済まない性格で写生一本やりの俳句の大量生産が始まる。

明治 26 年には四千句以上も作り、子規自身が後に「ここに至って濫作の極に達したようである。实景ならばなんでも句になると思ったのは間違いであった」と述懐している程である。

宗匠達を無差別攻撃し、芭蕉の俳句さえそのほとんどは駄作だと決めつけた子規だが、自分自身もそれを上回る駄作の量産を自認していたわけである。

しかし子規は明治 32 年の「ほととぎす」紙上で「美醜錯綜し、玉石混淆したる森羅万象のなかより美を撰り出だし、玉を拾い分くる文学者の役目なり」と述べ「写生」のなかに美を「発見」する作業の必要性を説いた。

「発見」とは広辞苑によれば「まだ知られていなかったものを、はじめて見つけ出すこと」である。しかし俳句の発見は、まだ誰にも知られていない新しい美を見つけて出すことではない。そんなものを俳句にしても誰も理解できず全くの独りよがりにな

ってしまう。

俳句の発見とは多くの人たちを納得させるための「言葉」ないし「措辞」を発見することなのである。つまり感動させる俳句とは「いかに美を発見したか」ではなく「いかに美を表現したか」なのである。

「桐一葉日当たりながら落ちにけり」「滝の上に水現れて落ちにけり」「まさをなる空より枝垂桜かな」作者の名など挙げるまでもなく、人々に膾炙されているこれらの句が表現している美は、誰もがはっきりと或いは漠然と感じていた美である。

しかし誰もが言えなかった。自分が感じて言えなかったことを言ってくれたという驚き―意表をつく感動が詩である。前掲の三句は自然の情景をただ素直に「言っただけ」である。

しかし月並みの「言っただけ」と違うのはこれらの句が読者の眼前に、その情景をありありと再現して見せ感動を与えることである。つまりこれらの句の作者は読者と美を共有する表現を発見した。

しかし作者と読者の美の共感といっても時代の進歩や変遷と無縁ではない。前掲の三句はいずれも明治時代のものだが、これが現在に創られていたらどうだろうか？教科書にも載っていて、われわれの潜在意識に「これが名句なのだ」として定着させられている。この時代には確かにお手本になる名句であった。凡人が逆立ちしても出来ないであろう。

しかし現在このような「言っただけ」の句が句会や新聞などの投稿欄で特選を飾るだろうか？先入観念を取り去るのは難しいが、虚心に読んでみると一概には肯定できないと思うのである。

流星の使ひきれざる空の丈 鷹羽狩行

夜空の途中で消えてゆく流星のはかなさを「使ひきれざる」と表現した。

この句に写生がないという人はいないと思うが、前掲の三句の写生とは明らかに違う。世の中の変遷や時代の進歩による近代的な自我は、新しい写生の在り方を求める。「流星の～」のと前三句を比べてみると、写生というものに求められるものが明治から昭和へ大きく変貌していることが感じられる。

「流星の～」の句にあるもの—それを私はドラマと呼びたい。単なる写生に終わらず、自然の中にドラマを発見（表現）している。前三句にドラマがないというのではない。ドラマとは読み手をはらはら、ドキドキさせるものであるが、その感動のさせ方が全く違うのである。

さて、滑稽俳句の在り方も自然や人事の中にドラマを発見することに他ならない。

「流星の～」の句の中に良質の滑稽の要素を見出すのは私だけだろうか？

無理のない擬人法が我々を作者が創り出すドラマの世界へ導く。しかもそれが自然への高度な写生ないし観察に裏付けられているのである。

銀行に怪しき身なり花粉症 高崎和音

この句の写生に注目する。そう言われれば確かに花粉症の時期に、怪しいとも言える風体の人たちが、場所もあろうに銀行の周りを徘徊している。その作者の行き届いた写生ないし観察がこの句の命になっている。

拙句

人妻に抱かれ上手の春キャベツ 前川敏夫

買い物をしている若い主婦たち、軽々とした新鮮な春キャベツ、そんな情景の観察な

くしてこの俳句のユーモアは生まれない。

滑稽俳句の在り方には八木主宰が説かれるように様々な方式がある。

子規が唱道し、俳句の原点として定着した写生—滑稽俳句はそれに飛躍的なドラマを加えることによって、ひとつの未来が拓けて来ると思う。